

宗教歌の原語演奏について

～ドイツにおける M. ルターの宗教改革と音楽から～

Über die ursprüngliche Sprachaufführung von religiösen Liedern

～von M. Luthers religiöser Reform und Musik in Deutschland～

ガハプカ 奈美

はじめに

我々が現在「西洋音楽」の確立過程でまず名前が挙げられるのが、J. S. バッハ (Johann Sebastian Bach: 1685-1750) であろう。(以下、バッハ) しかし、バッハが誕生する200年ほど前に音楽的源流を見ることができる。それは他でもない M. ルター (Martin Luther: 1483-1546) である。(以下、ルター)

ルターは16世紀初頭から17世紀前半にかけて起きた西欧キリスト教界における改革運動である宗教改革¹⁾によって、当時のヨーロッパを宗教的・政治的に大きく2つに分ける紛争を起こした人物である。なぜ宗教家であるルターが音楽的源流を流すことができたのか、またバッハはなぜルターから音楽的源流を受け継いだのか、疑問に思うところである。またキリスト教は、「言葉の宗教」とも言われ、いわゆる「言語」の側面と「言葉」の側面を持ち²⁾その両面を発展させながら時間をかけて歴史を作り上げてきた。

一方日本には、インドに始まった仏教が中国、朝鮮半島に伝わりその後、日本にももたらされ、日本仏教として形成されていった。(538年一説に552年)やがて宗派が結成されていき、鎌倉時代には定着した仏教文化を背景に、法然(1133-1212)の浄土宗、親鸞(1173-1262)の浄土真宗、日蓮(1222-1282)の日蓮宗など日本人自身による独自の仏教が創唱された。また、この時代には入宋した栄西と道元により、臨済宗と曹洞宗が伝えられた³⁾。このように様々な宗派が形成されたことから、日本の宗教改革は鎌倉仏教であるとも言われてい

る。

本稿では、キリスト教が「言葉の宗教」と呼ばれ、クラシック音楽の音楽的源流を築いた背景と、ルターが誕生する200年以上前に日本でも同じように「言葉」の力によってその教えを伝えんとした親鸞に焦点をあてて述べる。中でもルターの音楽観からバッハがどのような影響を受けて、後のコラールなどを作曲していたか探るとともに、その影響を受けて発展をしている日本の音楽にも迫る。

本論の目的は、西洋音楽の影響と日本独自の音楽の影響を受けてさらなる発展を続けている仏教讃歌のより良い原語演奏のための奏法を探ることにある。

1. ルターの宗教改革と讃美歌

1-1 ルターの宗教改革

改革が起こされる前、キリスト教の中心はカトリック教会だった。教会は様々な階級を組織し、力もつけてきたが、聖職者の世俗化によって内部から腐敗が広がっていった。14世紀から15世にかけてヨーロッパ内でも教会改革者によって腐敗改善を訴えた動きはあった。そのような流れの中、1483年にルターは誕生する。そして、エアフルト大学文学部で学んでいたある日、落雷によって死の恐怖と向き合ってから「死」について深く思案するようになった。その後ルターは1504年司祭となり神学を極める。1511年にはヴィッテンベルク大学で神学教授を務め、「詩や罪」の問題について深く思案し、自分の使命について悟っていった⁴⁾。

その後、ドイツでは、16世紀初頭からカトリック総本山であるサン＝ピエトロ大聖堂の建築費を賄うため免罪符⁵⁾の販売が行われた。このことをルターはカトリック教会の腐敗だと怒りを抱き、1517年当時教授を務めていたヴィッテンベルク城教会に「免罪符に対する95箇条の提題」(写真1)・(写真2)を発表する。発表時はラテン語であったがその後ドイツ語に訳され発表すると瞬く間にドイツ国内に広まった。



写真1 城教会の95箇条の提題

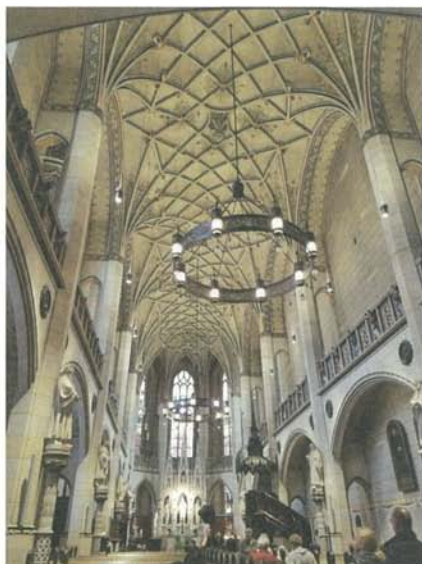


写真2 城教会内部

ルターは、1517年10月31日、下記のような内容で、『九十五カ条の提題』をヴィッテンベルク城教会の門に貼り付けた。ここでは最初の10提題のみを掲載するが、ルターが当時のカトリック教会に対して「間違いを正してほしい」という願いと怒りが読み取れるであろう。

『95 Thesen an der Schlosskirche zu Wittenberg』

『ルター95箇条の提題』

1. Indem unser Herr und Meister Jesus Christus sagte: “Tut Buße” usw. (Matth. 4, 17), wollte er, daß das ganze Leben der Glaubenden eine Buße sei.
1. 私たちの主であり師であるイエス・キリストが、「悔い改めよ……」〔マタイ 4. 17〕と言われたとき、彼は信ずる者の全生涯が悔い改めであることを欲したもうたのである。

2. Dieses Wort kann nicht als Aussage Über die sakramentale Buße (d. h. das Sündenbekenntnis, das das Priestertum abnimmt, und die Genugtuung, die es auferlegt) verstanden werden.
 2. この言葉が秘跡としての悔悛（すなわち、司祭の職によって執行される告解と償罪）についてのものであると解することはできない。
 3. Es bezieht sich aber auch nicht nur auf die innere Buße, denn es gibt gar keine innere Buße, die nicht äußerlich vielfältige Abtötungen des Fleisches bewirkt.
 3. しかし、それは単に内的な悔い改めだけをさしてはいない。否むしろ、外側で働いて肉を種々に殺すことをしないものであるなら、内的な悔い改めはおよそ無に等しい。
 4. Daher bleibt die Strafe, solange der Selbsthass (d.h. die wahre innere Buße) bleibt, nämlich bis zum Eingang in das Himmelreich.
 4. そのため、自己憎悪（すなわち、内における真の悔い改め）のつづく間は、すなわち、天国にはいるまでは、罰（poena）はつづくものである。
 5. Der Papst will und kann nur die Strafen erlassen, die er aufgrund seiner eigenen Entscheidung oder die der kirchlichen Gesetze auferlegt hat.
 5. 教皇は、自分自身または教会法が定めるところによって課した罰を除いては、どのような罰をも赦免することを欲しないし、またできもしない。
 6. Der Papst kann Schuld nur vergeben, indem er erklärt und bestätigt, daß Gott sie vergeben hat.
- Außerdem kann er sie in den ihm vorbehaltenen Fällen vergeben, in denen die Schuld ganz und gar bestehen bleibt, wenn seine Vergebung verachtet wird.
6. 教皇は、神から罪責（culpa）が赦免されたと宣言し、確認するか、あるいは、もちろん自分に留保されている事項について——これらの事項を軽侮したら、罪責はまったく残ることになろう——赦免する以外には、どのよう

な罪責をも赦免することはできない。

7. Überhaupt vergibt Gott keinem die Schuld, ohne daß er ihn zugleich in allem gedemütigt dem Priester als seinem Stellvertreter unterwirft.

7. そもそも神は、ご自身の代理者である司祭に謙虚に服従しないような者の罪を赦されることは決してない。

8. Die kirchlichen Bußbestimmungen gelten allein für die Lebenden; und den Sterbenden darf nichts aufgrund dieser Bestimmungen auferlegt werden.

8. 教会法上の悔い改めの規定はもっぱら生きている者にだけ課せられているのであって、それによれば、死に臨んでいる者には何ひとつ課せられてはならないのである。

9. Daher handelt der Heilige Geist zu unserem Wohl durch den Papst, indem dieser in seinen Verordnungen immer den Fall des Todes oder der Not ausnimmt.

9. したがって聖霊は、教皇が教令中においていつも死と緊急事の例外するという仕方で、教皇をとおしてわれわれに恩恵を施して下さる。

10. Unverständlich und schlecht handeln diejenigen Priester, die den Sterbenden kirchliche Bußstrafen für das Fegefeuer aufsparen.

10. 死に臨む人に、教会法による悔悛を煉獄にまで留保するような司祭たちは、無知で悪い行ないをしているのである。 (日本語訳筆者)

などと聖書から引用したり、ラテン語によって共通使用していたような単語にはドイツ語で説明書きをくわえたりしながら、痛烈にカトリック教会が打ち立てた免罪符制度を批判した。ただし、神学的提題と哲学的提題を基に示している。とりわけ神学的提題では、「十字架の神学」の核心を次の4つをもって示している。

1、律法とそれにもとづく人間の行いによっては、人間は救われないこと。

2、罪に落ちた後の人間の自由意志とは名ばかりであって、これによるかぎり、人間は罪を犯すほかないこと。

3、神の恵みを得るには、人間は自己自身に徹底的に絶望するしかないこと。

4、会のすくい啓示は、キリストの十字架によってのみ与えられること。

また哲学的提題では、キリスト教と全く関係のないアリストテレスを根拠として営まれる当時の神学を批判し、神学をギリシア哲学から解放すべきであるとの立場を明らかにした⁶⁾。これを機にルターは次々に書籍を出版し、教会批判をした。

その後もカトリック教会への批判を辞めなかったため、遂に追放されてしまう。

法律の保護がなくなってしまう暗殺の危険まであったとされるルターであったが、当時有力諸侯ザクセン選帝侯フリードリヒにかくまわれる。ルターは当時、「聖書は聖職者のみならず、信仰するもの皆が自分で読むことが出来なければならない」と感じており、聖書のドイツ語訳を考えていた。そこでかくまわれたヴァルトブルク城（写真3）で聖書のドイツ語訳に専念することが出来た。ルターは、ギリシャ語の原文にあたりつつも手を加え言い換えを行った箇所もあるが、これはルターの関心が、聖書の文字や字句の細部にこだわること



写真3 世界遺産ヴァルトブルク城

ではなく、そこに示されている神の恵みのことば、すなわち福音をドイツ語でドイツの人々の心に届けたいという強い思いが込められているのが最大の特徴である⁷⁾。

1522年9月にドイツ語訳の聖書が印刷されると高価でありながら瞬く間に完売し、自分たちの言葉で読み、理解できるあるいは文字が読めないものにとっては読み、理解した人たちから自分たちの言語で生きたことばとして聞くことが出来る喜びを体験した。

1-2 ルターと宗教音楽

当時の人々は礼拝内で話される内容については全く理解できなかった。教会内に聖書の内容を示したステンドグラス（写真4）、彫刻や絵画（写真5）などを見て内容の理解をしようとしていた。

ルターは、教会音楽の目的はキリストの言葉を音楽に込めて表すことだと考えていた。彼自身がなによりも音楽を愛していた。聖書をドイツ語に訳をした彼は、歌詞にも聖書や典礼所で用いられるラテン語だけではなく、ドイツ語も用いて奏されるべきだと考え、自ら多く歌詞を書き、作曲も行った。

世俗歌曲の歌詞を宗教的なものにかえて作ったコントラファクタや、ホモニックであったコラルからルター派独自に発達させた多声コラルなどが生まれ、16世紀後半には、コラルの旋律から派生したコラル・モテットとして音楽ジャンルが確立した。当時はキリスト教信者だけのものであったが、その後、バッハやヘンデル（Georg Friedrich Händel：1685-1759）などの作曲家が育ち徐々にキリスト教信者のみならずその音楽に親しむようになった。このことは、キリスト教独自の音楽性であり、他の宗教ではみられない歴史的芸術遺産と言っても過言ではない。



写真4 聖ゲオルグ教会 アイゼナッハ



写真5 聖母教会 ドレスデン

1523年、1524年にまず「礼拝改革」からゆっくり始めた。礼拝には、会衆の賛美の呼びかけ創作をはじめ、その後に中世以来の教会財産の活用、地域福祉の提言、学校教育の提案などが続いた。民衆運動としての宗教改革はルターによって、当時の民衆の社会生活のあり方そのものを変えるようなものとなった。ルターは常に社会の再形成を目指していたのであって、決して破壊を呼び起こすことではなかった⁸⁾。

讃美歌はキリスト教の礼拝をおこなう中で必ずあるものであるが、教会に集った人々が歌う讃美歌を始めたのがルターである。宗教改革とその思想を歌い上げる讃美歌は、文字を読めない人々にとっても心揺さぶられるものであり、説教などで聴く言葉とは全く違ったものであった。

Nun freut euch, lieben Christen g'mein

Ein Danklied für die höchsten Wohltaten, so uns Gott
in Christo erzeugt hat



譜例 1 1523年にルターが作曲した福音を伝える讃美歌⁹⁾

譜例 1 の讃美歌〈Nun freut euch, lieben Christen g'mein〉〈ただ喜べ、親愛なるキリストの教会よ〉は、歌詞が10番まであり、全体を聖書の〈ローマ第1章17節～18節〉の内容を中心に作詞されると、すぐに歌詞のみが印刷され各地へと広まった。ここに挙げる楽譜の旋律はルターが以前に旅人の歌を聞き、それを基に作曲されたものであるが、歌詞が広まると、各地で様々な旋律を用いて歌われた¹⁰⁾。庶民の身近な感情と聖書に基づいた内容とを合わせた歌となっており、ルターがあるいは本来のキリスト教が目指した核心を歌っている讃美歌であるといっても過言ではない。

歌詞の内容は次のようになっている。

- | | |
|--|----------------------|
| 1. Nun freut euch, lieben Christen g'mein, | 1. ただ喜べ、親愛なるキリストの教会よ |
| und laßt uns fröhlich springen, | 私たちは慰められたただ一人でも |
| daß wir getrost und all in ein | 共に喜び立ち上がろう。 |

mit Lust und Liebe singen,
was Gott an uns gewendet hat
und seine süße Wundertat
gar teu'r hat ers erworben.

喜びと愛をもて歌い、
神が私たちにしてくださったこと
素晴らしい奇跡を
奇しくも成し遂げられたのだから。

2節以下も1節と同じように1行ずつ日本語訳を試みた。以下日本語のみ載せておく。

2. 悪魔に私は捉えられ、
死の中で滅びた。
私の罪は日夜私を苦しめ
その中に私は生まれた、
私はいよいよ深く沈んでいき
私のいのちによいものはない。
罪は私をとらえた。

3. 私のよい行いは役に立たず
行いと共に罪に堕ちていった
自由な行いは神の裁きを避け
善に向かって死んでしまった。
不安は私を絶望へと導き
死以外は私には何も残らない。
地獄へと沈むのだ。

4. 永遠の神の御心を
私の行いのために大きく傷つけた。
神はその哀れみを想い
私を助けようとなされた。
神は父の御心を私へと向けてくださり
それは神において戯れ事ではなく、
最善のものををご用意くださる。

5. 神はその愛する子に言われた。
「あわれみの時は来た。
行け、わが心の、尊い冠よ。
哀れな者の救いとなれ。
彼を罪の中から助け出すのだ。
その前で死を殺すのだ。
彼をあなたと共に生かすのだ」。

6. 子は御父に従順だった
この地上の私のところへと来た。
清い、優しい女性から生まれ、
私の兄弟となった。

7. 彼は私に行った、
「しっかりとつかまっておけうま
くいく。
あなたのために私は私のすべてを

御力を秘かにつかい
私の哀れな姿を取り去り、
悪魔をとらえようとなさった。

与えよう。
あなたのために戦おう。
私はあなたのもの、あなたは私の
もの。
私が居たいところに、あなたも居
る。
敵も我々を隔てられない。

8. 敵は私の血を流させる
そして私の命を奪うであろう。
すべて私はあなたのために忍ぼう。
堅い信仰でもってこれを掴むのだ。
私の命は死のみこみ
私の罪のなさがあなたの罪を担う。
あなたは救われる。

9. 天の御父のもとに
この生から私は行く。
私はあなたの師となろう。
霊を私はあなたに与えよう。
霊は悩みの中のあなたを慰め、
私をよく知ることことを示し、
真理の中を導く。

10. 私がしたこと、教えたこと、
それをあなたは行い、教えなさい。
これにより神と御国はいよいよ多く、
賛美と栄を得るのである。
人間の定めに用心しなさい。
それは高貴な宝を汚す。
私はこれを最後に遺す」。

アーメン

(日本語訳筆者)

このように10節まで日本語で見るとキリスト教信徒のための神学であることがわかる。ルターは、聖書のドイツ語訳のみならず、讃美歌によって人々が迷わず神の福音に立って歌い、信仰していけるように導いた。

併せて旋律においても、後世のクラシック作曲家がしたように、1500年代において既にルターは、歌詞を朗読した時の抑揚や母音の長さや旋律やリズムが付いた時のそれとを一致させている。

譜例に挙げた讃美歌の最初のフレーズについて母音の長さやリズムを表にしてみると次のようになる。(表1)

歌詞：	Nun	freut	euch,	lie	ben	Chri	sten	g'mein
母音：	u	eu	eu	ie	e	i	e	ei
リズム：	♪	♪	♪	♪	♪	♪	♪	♪
発音：	短	2重母音	2重母音	長母音	語尾	短	語尾	2重母音

表1 歌詞の母音の長さやリズムについて

最初の「nun」の母音は「u」で短母音には八分音符が配され、その他2重母音や長母音に関してはすべての母音に四分音符が配されている。ただし、「lieben」の「e」にかんしては、短母音であるが四分音符が配される。これは「親愛なる」という大事な意味を表す言葉の語尾にあたるため落ち着いた雰囲気や言葉自体をかみしめ言葉の余韻に浸ることができるように配慮されたものと解釈できる。その次にさらに大事な言葉である「Christen」が続く。ここでも短母音に四分音符を配ししっかりと発音して唱和できるような工夫がなされている。

また、小節線が描かれていないことから、リズムを重視したというより、語るように唱えたのではないかと推測できる。

このようにしてルターは聖書に忠実にしかし庶民にも理解が可能であるように生活にも寄り添った内容、旋律で多くの讃美歌を世に送り出した。

これまで全く音楽にも宗教にも自分の力で親しむことの出来なかった民衆にとってこのような体験が普段の生活にも大きく影響を及ぼしていったことは想像に難くない。

こうして庶民の生活に浸透していった讃美歌から様々なものに変化が訪れることとなる。

また、聖書や讃美歌が庶民の生活に浸透していくと同時にルター自身は自身の子どもからヒントを得、子どもに対する家庭教育に役立てるようになって行った。そしてそれが現在の学校教育として発展を遂げていったのである。

2. 仏教の宗教改革

これまで宗教改革を行ったルターとルターの音楽について述べてきた。キリスト教に限らずその儀式と深い関係にあるのは、「音楽」であろう。ここからは我が国の仏教に話題を移して考えてみることにする。

2-1 仏教と宗教改革

仏教の宗教改革に関して鎌倉仏教とも言われるが、宗教学者の山折哲雄は『親鸞をよむ』の中で、「わたしは長いあいだ、日本に「宗教改革」が本当にあったのだろうか、疑問に思ってきた。その後の歴史を仔細にたどっていけばいくほど、そんな光景はどこからも見えてはこないことに気がついた。」¹¹⁾

などと述べ、日本の仏教において他の宗教と同じように考えられないような経過をたどったと説明している。それも、「言語」や「言葉」の流通が大きく関わっていると考える。「言語」は様々な立場で言葉の使い方の差こそあれ、日本語として使用されていたことは間違いない。しかし、「言葉」に関しては、将軍や公家の他一部の知識人のみにしか使用や理解ができないものであり、国を支える一般庶民である農民にはほとんど理解されなかった。単に文字を読むことが出来ないということは大きく仏教の発展に影響を与えた。

2-2 仏教の音楽と言葉

仏教で最初に存在した「音楽」は、声明であろう。声明は、仏教儀式の中で唱えられる声楽そのものを指す。その起源はインドであり、やがてはチベット

中国を経て日本に伝来された。現在も儀式の中で受け継がれている伝統音楽である。

日本へ仏教が百済から伝えられ、これと共に仏教音楽が伝来したと思われる。古い記録では、天平勝宝4年(752年)東大寺の大仏開眼の音楽祭には、唐楽や林邑楽などの音楽と並んで、梵音に200人、錫杖に200人、唄が10人、散華10人が演奏した。と「東大寺要録」に残っている。というように、儀式の際に「音楽」を重要視し、いつも共にあったという事である。ただ、声明はそこに集ったすべての者が唱えられるものとは考えにくく民衆において声明は、聴いて感じるものという捉えであったのではないだろうか。

そこで大切になってくるのが「言葉」である。特別な階級の者だけが理解できるものではなく、一般庶民が聴き、理解し、自分でも口ずさむことが出来ることが大切である。

仏教讃歌ではその思想が強く「歌詞」に反映される。「歌詞」にどのような言葉を使用するかで庶民へ教への伝わり方が変わってきてしまう。

1. ではルターがドイツの一般庶民も自分自身で「聖書」を読み理解し、「讃美歌」を歌い社会活動へ活かしていくというような道筋を立てた。日本では、「歎異抄」があり、「仏教讃歌」が同じように生まれた。

一般的にこの時代に「歌・唄」というと、「今様」ではないだろうか。「今様」は当時において最新の歌であるため、当時の流行りや人間模様が反映されたものである。その中には、当時の恋愛事情、風景、旅の歌、そして宗教歌も多く入っている。

『万葉集』の時代が貴族社会の初めであったとすれば、『梁塵秘抄』は時代のその終わり、貴族権力の崩壊直前の時期であった¹³⁾。と言われるように当時の人々が自由にありのままを記した。

親鸞の残した和讃には、「万葉集」のリズムを受けている¹⁴⁾が、歌詞を書く際に考え方や感じ方に関して大いに当時の様子を表す「今様」が影響を及ぼしていると考えられる。

讃歌の中で「和讃」を歌詞として使ったものは多くあるがここで以前にも挙げた『恩徳讃』を挙げ、言葉、音程やリズムについて詳しく見てみよう。

〈恩徳讃〉

如来大悲の 恩徳は
身を粉にしても 報ずべし
師主知識の 恩徳も
ほねをくだきても 謝すべし

七五調で四句一章の構成となっている。七五調のリズムを使用することで親鸞は一般に仏教の教えを身近なものとして、しかしその教えの神髄をしっかりと伝えることに成功している。

このご和讃に2人の作曲家が作曲している。その一人は、清水脩（しみず おさむ 1911-1986）清水は真宗大谷派の寺院に生まれたという環境もあり、「樹下燦々」などの仏教讃歌の作品も多い。（譜例2）もう一人は澤康雄（さわ やすお 1888-1932）である。澤は、恩徳讃を1918年に浄土真宗本願寺派ハワイ開教区に合わせて作曲した。（譜例3）また1926年には、日本を代表する作曲家である山田耕作（やまだ こうさく 1886-1965）と「らいさん」という



譜例2 清水作曲〈恩徳讃〉1952年作曲



譜例3 澤作曲〈恩徳讃〉1918年作曲

書物も刊行している。

では次に言葉一つひとつの母音の長さとして現在でも広く歌われている清水脩作曲と澤作曲の旋律（いずれの楽曲も4分の4拍子）でリズムを見てみたい。

（表2）

歌詞：	に	よ	ら	い	だ	い	ひ	の	お	ん	ど	く	は
母音：	o	a	i	a	i	i	o	o	-	o	u	a	
リズム（清水）：	♪	♪	♪	♪	♪	♪	♪	♪	♪	♪	♪	♪	♪
（澤）：	♪	♪	♪	♪	♪	♪	♪	♪	♪	♪	♪	♪	♪
発音：	拗音	短母音	短	短	短	短	短	短	撥音	短	短	短	

表2 恩徳讃、歌詞の母音の長さとして

全体的に見ると音符自体の長さについては清水と森ではほとんど差はないことがわかる。清水作曲のリズム欄の下線部は一つの母音（短母音）に二つの音が配され、メリスマが利用されて、西洋音楽に慣れている我々にも歌唱しやすく、歌詞内容も優しく伝わってくるようである。

一方、澤作曲のリズムは、短母音一つに対し一つの音を配し、親鸞の書いた和讃そのものの言葉のリズムを大切に旋律のリズムが配されていることがわかる。

澤の〈恩徳讃〉は1918年に作曲され、清水の〈恩徳讃〉は1952年に作曲されている。

実に34年の時を経て同じ歌詞を使用して作曲がなされたのである。

澤が作曲した1918年日本では大正デモクラシーの真っただ中であつた。清水の作曲した1952年（昭和27年）は高度成長期に向かって様々なことが稀に見るスピードで変わっていった時期である。とこのように社会的背景に大きな差があり、西洋から入ってきた「クラシック音楽」というものの理解にも大きな差

があったに違いない。

クラシック音楽は前述のように、音楽の源流はルターの讃美歌であり、それを受けクラシック音楽として世に遺してきたのはJ.S. バッハである。バッハが活躍したころは日本ではちょうど江戸時代である。公式に日本へクラシック音楽が入ってきたのは今から140年ほど前のことであり、明治時代の始めである。もっとも1540年代の鉄砲伝来などでキリスト教が上陸しているため、西洋の楽器や讃美歌のような音楽にあたるものはあったかもしれない。現に、1579年に完成した安土城には、その翌年である1580年に安土のセミナリヨが完成している。様々な反発もあったようであるが、セミナリヨではキリスト教の教育が行われていた。セミナリヨでの教育内容は、当時のカトリック教会の公用語であったラテン語の古典と日本の古典を学び、当時日本の教育にはなかった音楽教育と体育教育を行われたようである。音楽教育の内容としては、クラヴィコードなどの器楽に加え、グレゴリオ聖歌や多声聖歌などが行われていた¹⁵⁾。当時、ヨーロッパでは中世ルネッサンス時代であるので、デュファイ (Guillaume Dufay 1397-1474) やジョスカン・デ・プレ (Josquin Des Prez 1450 あるいは1455-1521)、パレストリーナ (Giovanni da Palestrina 1525-1594) などが伝わっていることが考えられる。

その後、様々な歴史の流れの中でキリスト教と西洋音楽とは途絶えたが、再びヨーロッパイタリアで「オペラ」が生まれると時代を同じくして、日本の出雲では歌舞伎が誕生している。歌舞伎の確立はおおよそ1652年と言われているため、イタリアで「オペラ」が誕生したころと重なる。一方、江戸では同時期に八橋検校(やつはし けんぎょう 1614-1685)が〈六段の調〉や〈千鳥の曲〉などを箏曲として発表し、「器楽音楽」の世界で日本独自の文化が生まれている。

このように音楽の歴史を辿っていくと、江戸で生まれた器楽音楽は信長の時代に築かれたセミナリヨでの教育に音楽教育があったという事が何かしら影響を及ぼしているとも考えられる。キリスト教宗教音楽の祖と言われるJ.S. バッハが生まれたのは、日本の八橋が亡くなった年、1685年であることも興味深い。

その後、日本では音楽界以外での活躍が目覚ましく起こる。例えば、杉田玄白（すぎた げんぱく 1733-1817）の「解体新書」（1774年）や平賀源内（ひらが げんない 1728-1780）のエレキテルの研究などであり、西洋ではこの時代はモーツァルト（Wolfgang Amadeus Mozart 1756-1791）が活躍していた。19世紀になると、日本では江戸後期であるが、十返舎一九（じっぺんしゃいっく 1765-1831）の「東海道中膝栗毛」や葛飾北斎（かつしか ほくさい 1760-1849）の「富嶽三十六景」そして伊能忠敬（いのう ただたか 1745-1818）が日本地図を作った。西洋では、ベートーベン（Ludwig van Beethoven 1770-1827）が活躍している。その後さらにピアノという楽器の近代化が進みようやく「作曲家」という存在が認識され始めた。日本の八橋の誕生から実に200年の月日経っている。

このような流れを経て日本の近代化を目指し、森鷗外（もり おうがい 1862-1922）らは、ドイツへの留学をはじめた。このころドイツで活躍していたのはワーグナー（Wilhelm Richard Wagner 1813-1883）であったため、ドイツ留学をした者たちが最初に日本で西洋音楽を代表する作曲家として伝えられたのがこのワーグナーであった。日本人で最初に管弦楽団をつくった山田耕筰は1910年から3年間ドイツへ留学している。山田はクラシック音楽を支える音楽家の中ではかなり早い時期に留学を果たした人物であるが、このようにして音楽の歴史を振り返ると日本音楽の発展の中で必然的に起こったことであることもわかる。

〈恩徳讃〉を作曲した澤は1918年に書いているため、山田がドイツ留学から帰り、管弦楽団をつくり、歌曲の作曲に関しては、「一音符一語主義」を打ち立てたのちであるため、澤が「一音符一語主義」の技法を用いて作曲しているのも不自然ではない。一方、清水は、1952年に作曲しており、クラシック音楽がずいぶん身近にあったであろうことと、自身はもともとフランス語を学んでいたこともあり、山田や澤のドイツの雰囲気とはまた違った雰囲気がみられると同時に寺院に生まれ育ち、身近に舞楽があったという環境が清水独特の世界

観を作り出している。

このようにして歴史を概観すると、作曲家個人の作風に様々な環境や社会的要因が背景にあり、発展していることがわかってきた。

おわりに

ここまで宗教改革、言語、言葉、音楽に焦点をあて歴史とその発展の変遷をたどってきた。このようにして見てみると、宗教と音楽は強い結びつきの中で生まれ互いになくってはならないものとしてともに発展をしてきたことが分かった。またその発展に大きな影響を及ぼしたであろう環境を言葉から読み取った。

直接関係していないような人物同士や国、文化でも歴史を辿っていくことにより何らかの繋がりが見えてきたり、出来事から派生したものであったりすることが確認できた。

日本で作曲されたあるいは日本語の詩のために作曲されたものは、以前ルターが行ったように、歌詞の内容は大方説明し、理解を求めその後は原語のまま演奏すべきであることを再確認した。それが一番「楽曲」として魂が宿り伝わるものであるからである。まして背景に宗教的な歴史を担っているならばなおさらそうである。

作曲者の想い、作詞者の想いにもそれら（それぞれの国の持つ特色、環境、言語的環境、宗教的考え方）が反映されて一つの作品が生まれているのであるから、演奏するものはそのすべてを「演奏」で体现するのが使命であると考えている。

本稿に投稿した写真はすべて筆者撮影によるものである。

註

- 1) 「聖書に書いてあることのみを信仰とするべきだ。」と確信し修道士の立場でありながらカトリック教会の贖宥状制度を批判。「教会は自ら変わるべきだ」とした。1517年10月31日、ヴィッテンベルクの教会の門に打ち付けられた、これが、宗教改革に繋がる「95か条の提題」。(現在、世界遺産) 一方、カトリック教会はルターに自説を撤回するよう迫る。これを拒否したルターは1521年教会を破門された。同年ヴォルムス帝国議会で神聖ローマ皇帝カール5世に召喚を受けるが、ここでも自説の撤回を拒否し、帝国追放を宣言された。その後ルターを支持していた有力諸侯の一人、ザクセン選帝侯フリードリヒ3世(賢公)に保護され、居城であるヴァルトブルク城にて新約聖書のドイツ語訳を完成させた。
- 2) 徳善義和『マルティン・ルター—ことばに生きた改革者』2017第6版 岩波新書
- 3) 『宗教年鑑』平成28年版 文化庁編
- 4) 『Luther zum Vergnügen』Herausgegeben von Johannes Schilling Mit 15 Abbildungen Reclam I. Das ist der Luther
- 5) 「免罪符」とはこの切符を購入すれば罪が許されるとして発行したカトリック教会公認の証明書のこと。
- 6) 徳善義和『マルティン・ルター—ことばに生きた改革者』2017第6版 岩波新書
- 7) 同上書
- 8) 同上書
- 9) 『Die Lieder』Martin Luther AKANTHUS 2013
- 10) 徳善義和『ルターと讃美歌』2017 日本キリスト教団出版局
- 11) 山折哲雄『親鸞をよむ』2014 第8版 岩波新書
- 12) 尾家京子「宗教音楽への関心—歴史的考察(その1)—」研究紀要 4, 55-73, 1987-06-15 東九州短期大学
- 13) 加藤周一「古文を読む 梁塵秘抄」1986 岩波書店
- 14) ガハプカ奈美「仏教讃歌の演奏についての再考」～日本・ドイツ公演を経て～京都女子大学宗教・文化研究所『研究紀要』第29号 35-60 2016
- 15) <http://bungei.or.jp/publics/index/74/e.jp/nobu/> 参照(2017年9月14日閲覧) 小和田哲男監修「芸術・美術・建築からわかる日本史」2012 成美堂出版 門馬直美「西洋音楽史」1996 春秋社

<キーワード>

宗教歌 マルティン・ルター 宗教改革 仏教讃歌